

高橋 啓太 准教授

研 究 業 績

2024年4月1日現在

著書・論文等の区分	著書・論文等の名称、発行所・発表雑誌・学会等の名称、共著の場合の編者・著者名、該当頁数	発行・発表年月
著書（単）	『「文学」の倫理と背理—戦後文学再検討の視座—』、中川書店	2017. 4
著書（共）	『日本探偵小説を読む—挑発と偏光のミステリ史—』、北海道大学出版会、押野武志・諸岡卓真編著、95～112頁	2013. 3
著書（共）	『花園大学人権論集③⑩ 人間社会の再生可能性』、花園大学人権教育研究センター編、66～100頁	2023. 3
論文（単）	「梅崎春生の市井小説とその可能性」、『日本近代文学会北海道支部会報』第5号、25～37頁	2002. 5
論文（単）	「「終戦直後の婦人」の創出—松本清張『ゼロの焦点』」、『りりば—す』第2号、46～55頁	2002. 10
論文（単）	「〈飢え〉と「エゴイズム」—梅崎春生「飢えの季節」を中心に」、『りりば—す』第3号、56～69頁	2003. 10
論文（単）	「〈逃走＝闘争〉する「言葉」—梅崎春生「桜島」—」、『国語国文研究』第126号、26～38頁	2004. 3
論文（単）	「断片性と物語—村上龍『共生虫』」、『りりば—す』第4号、97～106頁	2004. 10
論文（単）	「「灰色の月」評価をめぐる—荒正人の「民衆」論」、『北海道大学大学院文学研究科論集』第4号、47～62	2004. 12
論文（単）	「荒正人—「文学」論から見る「エゴイズム」」、『国文学解釈と鑑賞』第70巻11号、128～131頁	2005. 11
論文（単）	「不可視性と戦争—梅崎春生「桜島」」、『絃説Ⅲ』第2号、38～43頁	2006. 2
論文（単）	「梅崎春生「桜島」—顕在化する〈身体性〉」、『日本近代文学会北海道支部会報』第11号、20～29頁	2009. 5
論文（単）	「竹内好の「政治」と「文学」—国民文学論を中心に」、『日本近代文学会北海道支部会報』第13号、43～59頁	2011. 5
論文（単）	「武田泰淳「審判」に見る「文学」の「政治」性—戦後文学再検討の試み—」、『昭和文学研究』第63集、1～12頁	2011. 9
論文（単）	「敗戦と「残余の生存」—武田泰淳「滅亡について」論—」、『国語国文研究』第140号、7～28頁	2011. 9

論文（単）	「「肉体」と「文学」の境界—「肉体の門」ブームと『近代文学』派」、『日本近代文学会北海道支部会報』第16号、11～19頁	2013. 5
論文（単）	「「文学」的主体の陥穽—『近代文学』派の「文学」と「肉体」」、『絃説Ⅲ』第11号、103-110頁	2015. 2
論文（単）	「現代高齢社会と戦後日本の小説—安岡章太郎「海辺の光景」」、『九州共立大学研究紀要』第6巻第1号、79-85	2015. 9
論文（単）	「「エゴイズム」と〈メロドラマ〉—野間宏「顔の中の赤い月」」、『近代文学論集』第41号、60～69頁	2016. 2
論文（単）	「教養科目におけるプレゼンテーション授業の考察」、『九州共立大学研究紀要』第7巻第1号、25～32頁	2016. 9
論文（単）	「大岡昇平『俘虜記』論—「国家」との関係性を軸に」、『近代文学論集』第42号、81～91頁	2017. 2
論文（単）	「戦後への〈違和〉—梅崎春生「無名颱風」」、『九州共立大学研究紀要』第8巻第1号、1～8頁	2017. 9
論文（単）	「宙吊りになるプロットと「遁走」—梅崎春生「日の果て」」、『近代文学論集』第43号、25～34頁	2018. 2
論文（単）	【研究ノート】「梅崎春生「侵入者」と戦後日本の住宅事情」花園大学日本文学会、『花園大学日本文学論究』第11号、53～61頁	2018. 12
論文（単）	「五味川純平『人間の条件』に関する序論的考察」、『花園大学文学部研究紀要』第52号、77～91頁	2020. 3
論文（単）	「五味川純平の中国観と『人間の条件』—第一部・第二部を中心に」、『花園大学文学部研究紀要』第53号、27～39頁	2021. 3
論文（単）	「五味川純平の引揚げ体験—鞍山・大連での動向」、『花園大学文学部研究紀要』第54号、21～34頁	2022. 3
論文（単）	「戦後の鞍山を描く—五味川純平『人間の条件』『歴史の実験』」、『花園大学文学部研究紀要』第55号、23～34頁	2023. 3
論文（単）	「五味川純平著作目録—ベストセラー作家の受容に関する研究のために—」、『リテラシー史研究』第17号、3～10頁	2024. 2
論文（単）	「『自由との契約』試論—物語の設定とポストコロニアルの視座」、『花園大学文学部研究紀要』第56号、31～46頁	2024. 3
その他（単）	〈書評〉「高木伸幸『梅崎春生研究 戦争・偽物・戦後社会』」笠間書院、『昭和文学研究』第78集、86～88頁	2019. 3
その他（単）	【研究動向】戦後文学の再審—『戦後文学の〈現在形〉』を手がかりに、『昭和文学研究』第83集、220～222頁	2021. 9
その他（共）	「夏樹静子作品事典」（「ドーム」「βの悲劇」）、『絃説Ⅲ』第14号、67、82頁	2018. 10

その他（共）	「五味川純平」、日本近代文学大事典増補改訂デジタル版	2022. 3
その他（共）	安藤宏・大原祐治・十重田裕一編『坂口安吾大辞典』、勉誠出版、163-164頁, 197頁, 264~265頁, 609~610頁	2022. 6
その他（メディア）	「編集長からの手紙 占領下の現実 目を背けず 松本清張で戦争をよむ」、『毎日新聞』2024年1月27日朝刊（大阪版）、21頁	2024. 1. 27
口頭発表（単）	「梅崎春生「桜島」—「死」と収束—」、日本近代文学会北海道支部例会、北海道大学	2000. 12
口頭発表（単）	「一九五〇年代の〈国民〉について」、北海道大学国語国文学会、北海道大学	2002. 6
口頭発表（単）	「末期と緊張の眼—梅崎春生「桜島」—」、日本近代文学会東北・北海道支部合同研究集会、青森県立図書館	2003. 7
口頭発表（単）	「一九六〇年代の梅崎春生—「記憶」を中心に」、文学・思想懇話会、北海道大学	2006. 9
口頭発表（単）	「「政治」と「文学」の位相—『近代文学』派と竹内好」、日本近代文学会北海道支部例会、北海道大学	2006. 9
口頭発表（単）	「梅崎春生の戦争小説とエゴイズム—「日の果て」「ルネタの市民兵」を中心に」、日本近代文学会九州支部春季大会、志學館大学	2015. 6
口頭発表（単）	「戦後日本の戦争小説とその可能性」、花園大学日本文学会公開講演会、花園大学	2018. 6
口頭発表（単）	「野間宏と京都」、花園大学京都学講座、花園大学	2019. 9
口頭発表（単）	文学作品におけるハンセン病表象 —松本清張『砂の器』を中心に—、花園大学人権教育研究会第117回例会、花園大学	2022. 10
口頭発表（単）	「「研究リソース」としての五味川純平—『職業作家の生活と出版環境』との接点」、『職業作家の生活と出版環境』シンポジウム、オンライン	2022. 10